

この企画は、日本造園学会の創立 100 周年及び GREEN×EXPO 2027 を契機として、気候変動と多発する自然災害、食料・エネルギー危機、感染症の蔓延などの世界的な課題に加え、本格的な人口減少及び超高齢化社会を迎えつつあるなど、時代が大きく変動する中で、「ランドスケープアーキテクトは明日の都市に貢献できるか」をテーマにこれからの都市のあり様について対談を行っていく、日本造園学会と都市緑化機構の共同企画です。

今回は、第4回として、井上成さん（三菱地所エリアマネジメント企画部 担当部長兼 東京藝術大学 特任教授）、北島宗和さん（(株) Chees 代表取締役）をお招きし、聞き手として秋田典子さん（千葉大学大学院教授、日本造園学会理事）、横張真さん（東京大学特任教授、都市緑化機構理事長）にご参加いただき、「アート&カルチャー」をテーマに対談していただきました。



（上左から、秋田典子さん、井上成さん、北島宗和さん、横張真さん。

下左から、松本夏生さん※、山崎嵩拓さん※、澤井拓磨さん※）

※松本さんは、井上さんとともにアートのまちづくりに関わったことがあり、またスケーターでもあることから。また、山崎さん、澤井さんは「ストリートカルチャーの導入による新たなまちづくり」の研究に取り組んでおられることから、オブザーバーとして参加していただきました。

横張真（以下、横張）：アートあるいはカルチャーと呼ばれるパフォーマンスは、これまで音楽や演劇、絵画、彫刻等、いずれも原則としては閉鎖された空間において、それを楽しみたい人々を主な享受主体としてパフォームされるものとされてきました。都市の屋外空間（ストリート）において、アノニマスな主体に提供されるものではなかった。しかし今、そうしたアートやカルチャーに、閉塞的な現代社会を打破し次代を担うヒントがあるのではとの期待が集まっています。今日は「アート&カルチャー」をテーマに、有楽町のまちづくりにアートやカルチャーを取り入れようという取組を進めていらっしゃる井上さんと、アートやカルチャーの表現としてのスケートボードの普及に尽力していらっしゃる北島さんにお越しいただきました。

まずは、お二人から、自己紹介を兼ねて、これまでに取り組んでこられたことなどをご紹介いただけますか？

井上成（以下、井上）：井上と申します。まちづくりにおいて、ハードを作る前提としてソフトがあるべきだという信念をもっていて、20年以上にわたり、環境共生や資源循環からはじまり、コミュニティの醸成、ウェルビーイングの創出といったその時々テーマに基づいて場づくりからプロジェクトづくり、仕組みづくりに至るソフト創出に取り組んできました。最近、人や企業、さらには日本経済の活性化のために、アートとかカルチャーが重要なのではないかと考えています。

その関連で、色々な団体に籍を置いていて、大手町・丸の内・有楽町、通称「大丸有」地区¹の環境共生型まちづくり推進協会、通称エコ



エコツェリア協会の発信拠点「3×3Lab Future」

出典：エコツェリア協会 HP <https://www.ecozzeria.jp/about/>

¹ 大丸有 INDEX（大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり 3 団体が運営する HP）：<https://tokyocomy.jp/>

ツツェリア協会²は、2007年に自ら創立し、いまでも理事を続けています。また、最近
は、有楽町を中心に、「有楽町アートアーバニズム」、略して「YAU」³というプロジェ
クトを推進しており、立ち上げからずっとプロデューサー的な立場で関わっておりま
して、アート、もしくはアートのモノやコトが、まちのクオリティや魅力を高め、
住人や来街者に対して何らかのインパクトを出せないかと考えて取り組んでいます。
さらに、大丸有から上野にかけて東京都心を、世界に対してどのようにプロモーショ
ン、マーケティングしていくのかという問題意識をもって、「東京ウェルシティ」と題
して、そのエリアにある、東京科学大学、東京大学、そして東京藝術大学の連携によ
って、大学が持っている知財、知見、人脈が、よりスピーディに社会にアクセスし
て、社会に対してインパクトを与えたり、あるいは技術やサービスの開発に繋がった
りして、ウェルビーイングな東京を実現できないかというプロジェクトを進めていま
す。そのご縁で、現在、東京藝術大学の特任教授を務めています。

北島宗和（以下、北島）：北島です。32年ほどスケートボードに関わっています。中
学2年生の頃、何もやることがなくて暇で、友達の家にあったスケートボードで遊び
始めたのですが、「チクタク」というジグザグに前に進む動きができなくて、自分だけ
後ろに進んでしまったんですよ。それで、とにかく前に進みたいって思いで練習して
いたら、近所のお兄さんが「オーリー」というジャンプを見せてくれて、それがとて
もカッコよくて、それから毎日スケートボードの練習をしていました。

中学3年生のときには初めてショップスポンサーが付き、大学時代にはプロスケータ
ーを目指して渡米しましたし、自分の名前を冠した板やウィール（タイヤ）などのプ
ロダクト生産活動をしていたこともあります。

² エコツツェリア協会 HP：<https://www.ecozzeria.jp/>

³ 有楽町アートアーバニズム HP：<https://arturbanism.jp/>

スケーターを増やしたいという思いで、2006年より15年ほど、新横浜公園スケボー広場で月1回のイベントとしてスクールをやっていたら、これが1日に200名くらい集まるような大きなイベントに発展しました。その後、新横浜公園の改装と、コロナ禍におけるスケートボードの流行を契機に、スケボー広場の運営管理を2年ほど経験しました。



新横浜公園 スケボー広場(全景)

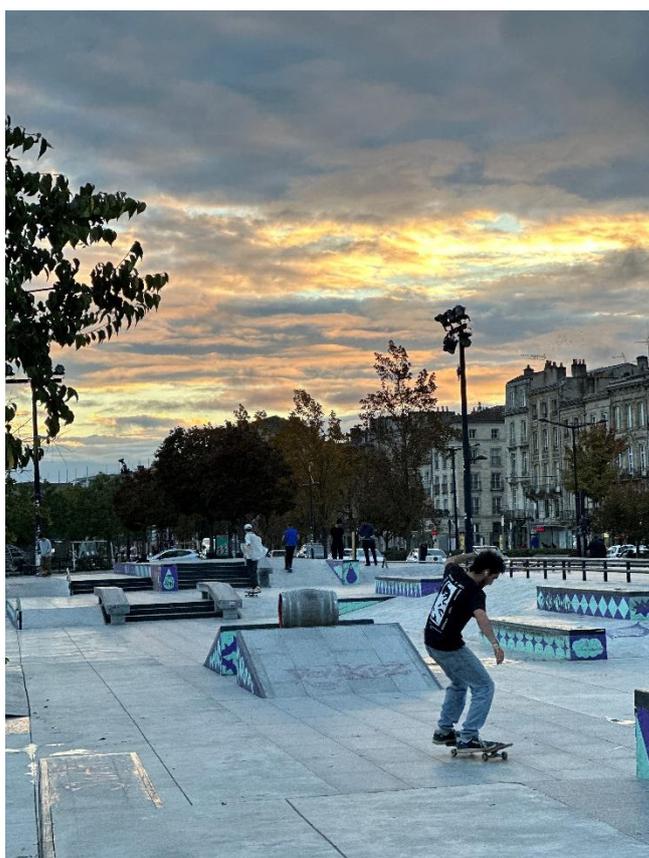
(写真提供:北島宗和さん)

20年近く、スケートボードの裾野を広げたいと活動を続けてきましたが、2021年の東京オリンピック、2024年のパリオリンピックで日本人選手が大活躍したことを契機に状況が一変して、メディアに取り上げられる機会も増え、今、非常に注目されている状況だと感じています。

注目を浴びている今だからこそ、スケートボードはアートでもあり、ファッションでもあり、ミュージックにも相通ずるカルチャーであり、単なるスポーツではない、という点をきちんと伝えていきたいと考えていますし、フランスのボルドーで進んでいるようなスケートボードとまちづくりの共存、それによるコミュニケーションの発展といったことを日本でも実現していくことができればいいなと思っています。



ボルドーの標識。朝 10 時から夜8時まではスケートボードに乗っていいルールになっており、地元住民を尊重すること、テラス席のある店舗に配慮することなどが書かれている



ボルドーのまちなかにあるスケートパーク。
柵がなく開放的な空間でスケートボードを楽しむ人々
(写真提供:北島宗和さん)

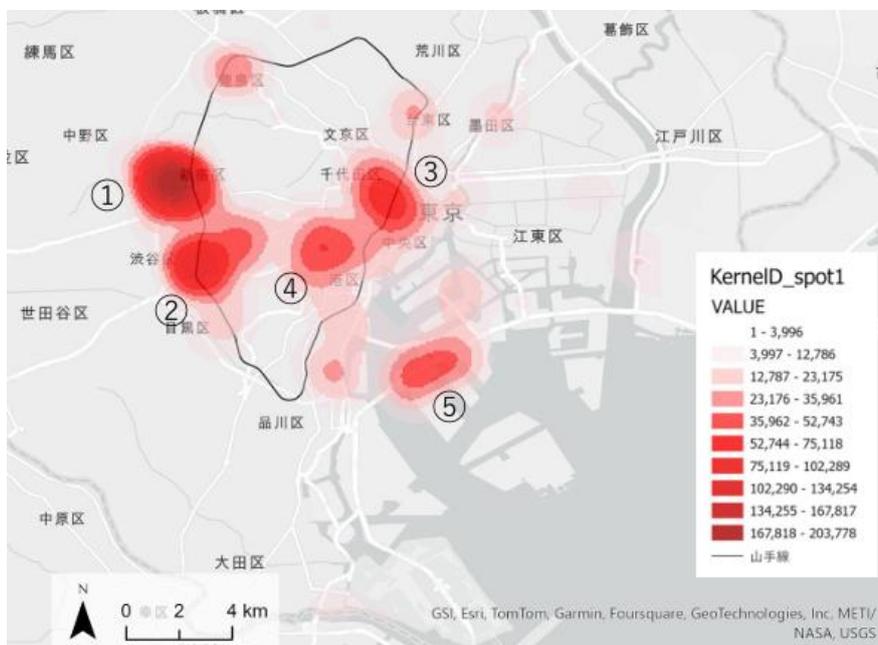
今は行政とも連携しつつ、神奈川県川崎市と埼玉県川口市の2拠点でのスクール運営を軸に、イベント等で体験会を開催したりしながら、スケートボードを広げていく活動をしています。

生まれ変わるビジネス街～クリエイターのカ～

横張：丸の内は、明治の頃から三菱地所が育ててきた、日本でも有数のビジネス街ですが、スケーターはあまり見かけませんね。

北島：そんなことはないですよ。この辺りにはスケートスポットも多いですし、僕にとって大丸有は20年以上利用している「遊び場」です。

ビジネス街はワクワクするような建物がいっぱいある、挑戦しがいのある遊び場だと思っていますし、写真や動画を作成することで自分を表現するクリエイターとして、どこをどう切り取るか、という視点でいつも見えています。



東京のスケーターへのヒアリング調査を通じた 255 か所の”有名な”スケートスポットの分布
(①新宿、②渋谷、③大手町、④赤坂、⑤お台場への集積傾向がみられる)

(画像提供: 山崎嵩拓さん)

横張：警備員や警察と追っかけっこにはならないんですか。

北島：確かに追いかけられますが、いかにしてそのまち、場所を使うか、新たな視点でアートとして表現してその瞬間を切り抜くか、というところにこだわっています。普通の街並みが、スケーターの視点を加えることによってアートに変わるのです。

ここ、スケボーできそうだな、と思うような場所には、スケートマーキングという、ウィール痕（タイヤの跡）があったりして、同じこと考えたスケーターがいたなとか、その痕跡の濃さを見て何回も滑っているな、とか思ったりします。

井上：大丸有を、遊び場と表現してくださるんですね。ものすごく嬉しいです。

ビジネス街も、そういう視点で見ると全然違って見えますね。

横張：本当ですね。今、北島さんから、表現者、クリエイターとしてまちを見ているというお話がありました。井上さんも、今、アートやカルチャーを取り入れたまちづくりに取り組んでいらっしゃるんですが、まちづくりの中でどういう課題があると認識されて、このテーマにたどり着いたのでしょうか。

井上：そうですね、多様性がキーワードになると思います。働くというソフトだけしかない既存のビジネス街は、機能性や効率性に重点がおかれ過ぎて、ヒューマニティーというか、人間味が感じられず、一人ひとりの人間の日常とか心とかに対しての配慮のなさに繋がっているように思います。今後益々働く人のニーズは多様化していくでしょうし、従来通りのまちづくりのままでは、まちは地盤沈下してしまうという危機感を持っています。

だから、有楽町の再開発にあたっては、今までと同じ計画の立て方、デザインの仕方でもいいのか、という課題認識に基づき、多様性を重視したまちづくりを進めたいと考えました。そのときに、同じような発想や価値観を持っていて、同じような体験をしてきた人間しかいなかったら、結局同じようなものができてしまうので、考える段階からいろんな人たちがそこにいるという状態を作らなくてはいけないと思いました。

今までビジネス街にいなかった人たち、かつ、こだわりがあって独自の価値観を持つ

ている人たちが増えれば、時にはちょっとした揉め事が起きるかもしれない。でも、それも許容できるような世界観を作っていくために、クリエイティブな人たち、アートやカルチャーに関わる人たちが集まる必要があると思ったんですね。

なので、有楽町では、コワーキング施設を作った際に、その中心部に「バー変態」を開きました。

横張：「変態」ですか？（笑）



バー変態

（写真提供：井上成さん）

井上：そうです、「変態」です（笑）。他の表現をするとオタクみたいな人というか、1つのことに、ぐぐぐっと入り込んで極めようとする人、そういう変態的な生き方をしている人がこれからは重要なんじゃないかと思ったんです。そして、「変態」たちが夜な夜な集まってくる居場所を作りたくて、「バー変態」という名前にしたのです。

バーでは、いわゆるビジネスパーソンではない人たちと、ビジネスパーソンがシームレスに混ざり合うので、そこから多様な活動が生まれることを狙いました。

北島：スケーターはみんな、オタクだと思います。ビデオを何時間もコマ送りで見ていられるような人の集まりで、オタク同士で化学反応を起こして非常に楽しいですよ。

クリエイターがスケーターになるのか、スケーターがクリエイターを生むのか、どちらが先かは分かりませんが、クリエイティブな仕事に就く人がとても多いです。

写真を撮る人、映像を撮る人、編集する人、デザインする人、映画監督もいますし、音楽制作者もいます。全ての分野のクリエイターが大勢いるのがスケートボードの世界だと思います。

横張：クリエイティブな人々が集まる、繋がっていくという点は、まさに井上さんが目指しているところと同じですね。

井上：そうですね。僕がカルチャーとかアートに注目し、期待もしている理由の1つは、アーティストと言われる人々が非常に純粹だからだと思います。何かを突き詰め、その奥底にあるものを明らかにしようとする。20年後の姿を想像して、それを表現する人たち。すごくピュアで、だからこそ今までダメだと言われていたものでも、まあいいかと人に思わせる、受け入れさせることができるのかなと思います。

守るべきところもありますが、変えていくべきところもないとまちはいつか陳腐化してしまうと考えています。一方で、既存のルール、確立されたイメージ、ブランドを一気に壊すことは難しい。

だから、いきなり壊すことはできないけれども、端っこの部分、境界線を溶かしていくというか、溶けるような何かが起きるデザインをするのが重要なんじゃないか。そしてそういうことができるのが、アートとかカルチャーに関わる、クリエイティブな人たちなんじゃないかなと思っています。

横張：「溶かす」、非常にいい表現ですね。壊すことと溶かすことの違いはどうお考えですか。

井上：いきなり境界を超えると相手は怒るけど、よくよく見てみたら超えていたということが続くうちに境界がなくなるという感覚です。そして境界線を意識しつつも、これぐらいだったら大丈夫なんじゃないかと果敢にトライする人たちをたくさん集めたい。そういう志向性、感覚、審美眼を持っている人が増えないと、まちは変わっていかないと思います。

カルチャーとしてのスケートボード～カッコいい！を貫く～

秋田典子（以下、秋田）：東京オリンピックのスケートボードの解説は、今まで聞いたことのないような、まさに境界線を溶かしたような解説でしたね。NHKのTV中継というドレスコードがある中でも、自分のスタイルを貫いていて、それでいいんだってみんな受け入れていた。NHKアナウンサーとの対比も面白く、なんだかほっこりしました。

北島：「超やべー」、瀬尻稜君ですね。ありのままの彼が、実況中継していて、非常にいい解説だったなと思います。

でも、オリンピックでスケートボードの認知度は上がりましたが、スポーツ化に向かってしまっている点を非常に懸念しています。スケートボードは、より多く板を回転させた方が勝ちとか、より速く走った方が勝ちというものではないんです。そういう競技としての側面より、その人自身が醸し出しているスタイルとか、かっこよさみたいなものが重要だと考えています。

「スケーターあるある」なのかもしれないですけど、「プッシュ」という、板を蹴って移動する際の、蹴り方、腕の振り方、顔つき、目つき、更には服装も含めて、そういうところを見るだけで大体その人の性格が分かりますし、どのぐらいのスキルなのかも分かっちゃいます。

秋田：茶道の所作に通じるものがありますね。

横張：茶道の所作って極めて合理的で、それが結果的に非常に美しいって言いますね。私も自転車に乗りますが、道ですれ違う一瞬で、相手の乗っている姿勢から、大体どれくらいの経験者か分かっちゃいますね。

井上：僕はスノーボードを黎明期にはじめましたが、最初はすごく冷たい目で見られました。そのうちに、それが面白そう、カッコいい、と思う人が増えて、ある時点でスキー人口を逆転しました。スケートボードも、今のように広がっていけば、もっとまちの中で見かける機会が増えるかもしれませんね。ただ、スケートボードは、純粋にスポーツだと思っている人も多いと思うので、スケーターはまちを使って表現するクリエイターであるという社会的な理解をもっと広める必要がありそうですね。

一方で、カウンターカルチャーというのは、マイナーなこと、人とは違うことがカッコいいという価値観もあるので、あまりメジャーになってしまうことにはちょっと抵抗感があるかもしれませんね（笑）。

北島：そうですね。学校では教わらないような、危ないことに挑戦するドキドキ感もスケートボードの魅力と言えるかもしれません。

とはいえ、スケーターは、ただカッコつけてるわけではなく、危険とか痛みを伴うことに挑戦して、体を酷使して表現しています。非常に難しい、危ないこと、とんでもないことを軽々とやってのけているかのように見せているけれども、相当練習してるな、相当鍛錬が必要だっただろうな、ということが、体験すれば分かってもらえるんじゃないかと思います。

スケートボードの世界では、ナンバーワンではなくオンリーワンが評価されます。オリンピックのように順位を決める場が全てではなく、それぞれがオンリーワンを目指すことができる世界です。今もまだまだ進化が続いていて、毎日のように、新しい表現の多様性、世界観が生まれて、それが評価されて、カッコよさに繋がっていく。その人の生き様まで全部出てきます。

オンリーワンのカッコいい！を目指そう

横張：今のお話は、研究活動にも通じるものがありますね。先日、ヨーロッパに行ってきたのですが、世の中がどんどん非予定調和的になっている。気候変動や自然災害の多発、地政学的リスク然り、そういう先の読めない時代に、そもそも計画の在り方が問われているのではないかという議論を、ドイツやデンマークの研究者としてきました。これまでのような、過去からのトレンドがそのまま未来に向かって伸びていくという予想に基づいて長期的な目標を設定し、その目標からのバックキャストにより5年後、10年後に何をしよう、という従来の計画のあり方が通用しなくなっている中で、余地とか隙間を確保する重要性、暫定であることを積極的に考える必要性が、今後高まっていくという意見で一致しました。

井上：その通りだと思います。50年後のまちの姿をすぐに描けるかと言われたら、そんなの誰も分からない。ですから、ある程度抽象的であっても、広く賛同を得られるようなビジョンのようなものがあれば良いのではないのでしょうか。なるべく多様なアイデアを取り入れつつ、暫定的に何かをやってみて、ビジョンも可変させていく余地を最初から持たせておくのです。そのように時代の変化に対応していけるような仕組みを考えていかねばならないと思います。

横張：そうですね。ヨーロッパ各国で極右政党が勢力を拡大するなど、排他的な、多様化を否定するような懸念すべき流れもありますが、一方で、例えばコペンハーゲンのスーパーキーレン公園のように、民族の多様性を尊重し、それを公園のような施設のデザインに活かしていこうとする動きもありますね。これからの日本でも、多様性や多民族性が大きな課題になっていくと思いますし、その際にはスケーターの、お互いを認め合い、称え合う姿勢がカギになってくると思いますね。



Photo by 横張真

スーパーキーレン公園(デンマーク・コペンハーゲン市)

移民が多く暮らす街につくられた、多民族共生をテーマにした公園。様々な民族を代表する遊具やアート作品が園内に配置されている。「私達はここでともに暮らしたい」というメッセージが、様々な言語によって語られている

北島：スケーターは、多様性を体現している存在だと言えます。ファッションもそれぞれの好みを表現できるし、その人の技術的レベルに応じて挑戦する姿勢を認め合い称え合っているし。海外でも、言葉を交わさずとも、相手のことが理解できて、すぐに仲良くなれたりするんですよ。一緒にイベント行こう、うちに泊まりに来いよとか、飲みに行くぞ、みたいなことが出会ってすぐに起きたりもします。

みんなにスケートボードを体験してもらえたら、戦争がなくなるんじゃないかっていうくらい、相互理解が進みますし、差別も存在しません。

子どもたちの健全な成長にもすごく役に立つところがあります。屋外で身体を動かすことで健全な成長を促すだけでなく、どうやったら技を習得できるかを考えたり、恐怖心を克服したり、そしてその挑戦をみんなで応援して、困難や痛みを乗り越えることができたらみんなでハイタッチして称え合うプロセスとか、他者に対する理解を深める、人間力を高めるといふ点にも、お金では買えない価値があると、スクールに通う子どもたちの保護者から評価されていると感じています。



スクールに通う生徒たちとプチトリップに。

とてもいい表情をしている

(写真提供:北島宗和さん)

井上：インターネット上でいいね！する虚像のコミュニケーションではない、相手の努力とか技とかをリスペクトして承認し合う、リアルなコミュニケーションが素晴らしいですね。

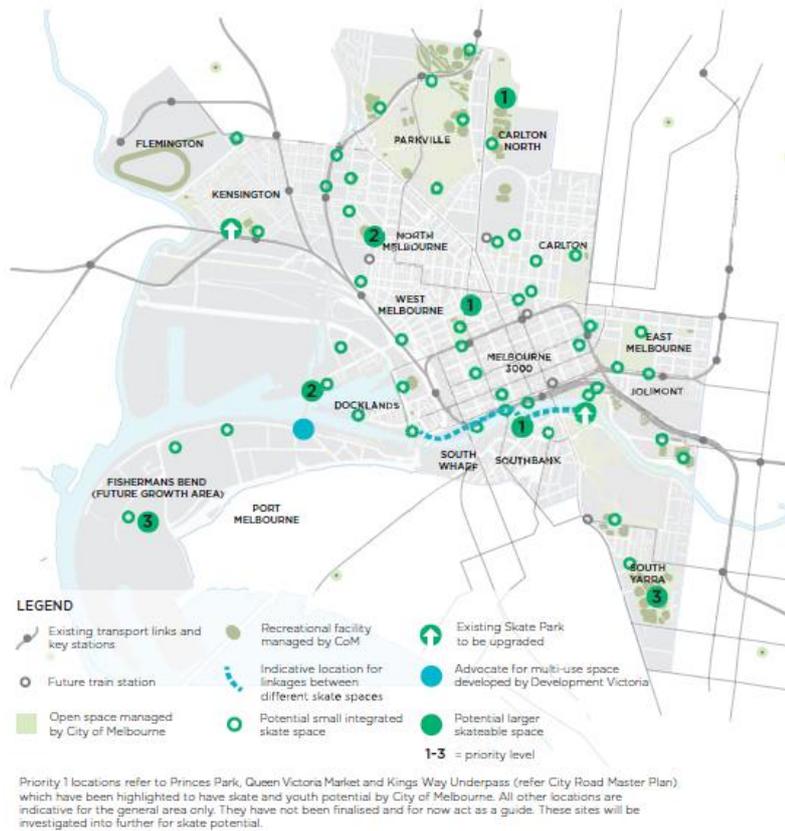
北島：さきほどコペンハーゲンが話題になりましたが、コペンハーゲンオープンという、年1回1週間開催されるスケートボードの祭典があります。同じようなイベントが東京でできたら、もう最高だなんて思います。

スケーターが世界中から集まって、多様性を生みながら、コミュニケーションがそこかしこで行われて、そこかしこでビデオの撮影合戦が始まって、集まった人たちがオンリーワンを目指すんです。

スラムも笑いも怪我也あって、オウンリスクとして自ら飛び込んでくる。

コペンハーゲンでは市長がこのイベントを後押ししています。ルールだからといって若者たちを排除するような社会では若者たちが希望を持ってないから、みんなが挑戦できる機会を作っていますとおっしゃっていて、とても共感できるし、いいなと思っています。

Opportunities to increase skate provision - indicative skateable spaces



メルボルンでもストリートカルチャー導入によるまちづくりが進んでいる

(出典:SKATE MELBOURNE PLAN)

井上: 技を磨き、リスペクトし合い、共感の輪を広げていく。ビジネスにも役立つ姿勢ですね。

横張: スケートボードの基本にある考え方は、極めて普遍的な話で、日本の将来にとって、不可欠な考え方や視点を提供してくれそうですね。

北島: スケートボードで一度転んでみると、それほど大事にならないな、ということが分かって、とりあえずやってみよう、という気持ちになることができます。僕自身、まちや地域をもっと良くしていこうとか、いろんな視点をもってチャレンジして

みようと取り組むことができます。スケーターは、言葉にするのが下手な人たちが多くて、言葉で表現することをダサいと思う人もいるんですが、この先、スケートボードがもっと発展していくためには、もっと言葉にして、社会認知度を上げていく必要があると考えています。

横張：その点も非常に共感できますね。研究も、対象を分析し、それを言語化し、他者に伝えることができはじめて社会的に価値を持つ、というところがあるんじゃないかと思います。言語化することではじめて、相手を納得させることもできるし、境界線を溶かすことも可能になると思います。

秋田：スケーターの視点から見ると、我々が見ているまちとは違うまちが見える、というお話は、研究がこれまで「当たり前」とされてきたことに疑問を抱くことから始まることに通じるものもありますね。転んで痛みを知ることで自身の成長や他者への共感が育まれる点も同じだと感じました。みんなが憧れて、やってみたいと思えるようなカッコよさを提示することが、ランドスケープ分野の魅力を高めるために不可欠ですね。

横張：本当にそう思います。今日はどうもありがとうございました。